

氏 名 佐藤 善人

題 目 義務教育期におけるプレーヤーの立場に立ったランニング学習に関する研究
ー児童生徒の「態度」の変容に注目してー

本研究では、児童生徒がランニングの価値を了解し、自身がめあてをもって主体的に挑戦する姿を導き出そうとして授業計画を立てたり実践を行ったりする、プレーヤーの立場に立って行った義務教育期におけるランニング学習が、児童生徒の態度にどのような影響をもたらすのかを検討することが目的であった。5つの授業改善の視点を取り入れ、ランニング嫌いを生む3つの要因を生じさせないように配慮した小学校や中学校を対象とするランニング学習を重ねることで検討を進めた。

第Ⅰ章では、現在のランニング学習は、児童生徒の立場に立った実践としては十分でなく、その結果多くのランニング嫌いを生じさせている問題点を指摘した。現状を改善することは、将来的にランニングというスポーツ文化が社会にますます根付き、豊かなスポーツライフの実現に寄与する可能性を拓くことに言及した。その上で、研究の目的を導き出した。

第Ⅱ章では、学習指導要領等の変遷から時代と共に体育授業におけるランニングの位置づけが変化し、現在では豊かなスポーツライフを実現するために体育授業は行われており、ランニング学習もそれに資する必要があることが理解された。一方で、実際は多くのランニング嫌いが存在している。先行研究の検討からは、ランニング嫌いが生まれる理由として「ランニングによる苦痛」、そして「比較・評価による苦痛」が挙げられた。また、「持久走と長距離走の混同」も教師の指導の一貫性の欠如を生じさせる一因であることが示された。この3つを「運動嫌いを生む3つの要因」と定義づけ、これらを排除してランニング嫌いを生まない実践の必要性が示唆された。

第Ⅲ章では、児童生徒のランニング嫌いの実態を把握することとした。本研究では社会心理学で用いられる「態度」に注目し、小学5年生と中学2年生がランニングに対して、どのような想いを抱いているのかを比較・検討した。その結果、5つの授業改善の視点が導き出された。児童生徒がランニングの価値を了解し、自身がめあてをもって主体的に挑戦する姿を目指し、これら授業改善の視点をもって授業計画を立ててランニング学習を実施することで、「ランニングによる苦痛」と「比較・評価による苦痛」を排除することに貢献する可能性がある。

第Ⅳ章では、小学校におけるランニングのあり方を、持久走の実践を通して検証した。ここでは態度の変容を評価するだけでなく、全身持久力の変容についても評価した。実践の事前事後に態度と20Mシャトルランテストを評価した結果、快的感情、認知的成分、行為傾向は有意に向上し、不快的感情は有意に低下した。非行為傾向に差は認められなかった。また、20Mシャトルランテストの平均値は有意に向上した。これらのことから、ここでの実践は児童の態度を概ね向上させ、全身持久力の向上にも寄与したことが示された。

第Ⅴ章では、中学校におけるランニング実践のあり方を、長距離走の実践を通して検証した。実践の事前事後において、態度と走能力を評価した。その結果、全体、上位群、下位群ともに快的感情は有意に向上し、不快的感情は有意に低下した。これらのことから第Ⅴ章の実践は生徒のランニン

グに対する好意的態度の形成に寄与したと思われる。また2000mの走能力も向上した。一方で、長距離走の学習は「ランニングによる苦痛」と「比較・評価による苦痛」を生みやすいという問題点も顕在化した。

第Ⅵ章では、小学5年生から中学1年生にかけて、同一の児童生徒の持久走・長距離走の学習を3年間追跡した。3年間の児童生徒の態度と走能力の変容を見ることで、シーケンスの視点からランニング学習の在り方を検討した。それぞれの学年において単元学習の事前事後のみの態度の変容をみると、今回の持久走、長距離走の学習は児童生徒の好意的態度の形成に寄与することが示された。また走能力に注目すると、小学校における20mシャトルランテスト、中学校における2,000m走の記録はどちらも向上した。つまり、スコープの視点からは、いずれも成果があったと言える。一方、シーケンスに注目すると、小学6年生の事後と中学1年生の事前で態度は大きく低下した。ここから、小学校における持久走と中学校における長距離走は、児童生徒の側から見るとつながっていないことが示唆された。

第Ⅶ章では、第Ⅵ章で導き出されたシーケンスの課題から、ランニングの多様な楽しみ方の中から生徒が選択して学習するランニング学習を中学2年生を対象として実施した。単元の事前事後で態度を測定した結果、快的感情、認知的成分は有意に向上し、不快的感情と非行為傾向は有意に低下した。行為傾向には差がなかった。生徒全体だけでなく、ランニングを嫌いであった生徒も同様の傾向が見られた。また、ランニングが嫌いであったうちの約86%の生徒が、これまで受けてきた持久走や長距離走よりも、今回の実践を支持した。

第Ⅷ章では、本研究の成果と課題を示した。先行研究の検討と質問紙調査から、ランニング嫌いを生む3つの要因と、5つの授業改善の視点を導き出し、4つの実践を通して態度や走能力を評価したことで、義務教育期のランニング学習のあるべき方向性を提示できたことは成果の一つとして挙げてよい。多くの小中学校で行われているランニング学習のシーケンスの問題点を指摘することで、児童生徒が自己決定しながら学んでいく学習の必要性の一端を示したことも成果と言える。一方で、多様な楽しみ方から児童生徒が選択する学習を、数年間にわたり同一児童生徒を対象として実践することはできていない。今後こういった実践を小中一貫して実施し、児童生徒の態度を評価する作業を行い検討することが課題として残された。(2327文字)